

シンフォギア×BOF

数多 命

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りです。

戦闘シーンまで行きたかったけど、無理だった・・・。

目次

シンフォギア×BOF

1

シンフォギア×BOF

「望む特典は、何か？」

「竜変身がしたいです!!!!」



「ッ!!」

マリア・カデンツァヴナ・イヴは、雑木林を駆け抜ける。

自らのシンフォギアである、黒いガングニールを纏い。

雨あられと注ぐ銃弾から逃げ回っていた。

ギアを纏っている以上、敵対組織である『特異災害対策機動部二課』にも感付かれて

しまうが、それもまた彼女自身の狙いだった。

そもそも、なぜこんなことになっているのかと言えば。

きつかけは三か月前、月が欠けてしまう『ルナアタック』と呼ばれる事件だった。

首謀者のフィーネが、米国と共同で設立した組織『F. I. S.』にいたマリアにとつても、他人事ではない大事件。

それからほどなくしたある日、外部組織からの報告で。

月の落下の可能性と、無辜の人々を切り捨てようとする悪意を知った。

故に彼女を中心とした少数数で、『QUEEN of MUSIC』の会場で武装蜂起。

世界中を敵に回す形で、世界の危機を拭おうとしていた。

当然、その行動をよく思わない組織は多くいる。

特に、月の落下を隠蔽しようとした米国政府にとっては、目ざわり以外の何物でもなかった。

(調と切歌、マムはもう十分離れただろう。二課の目も、私の GANG ニールに釘付けのはず……!)

雄叫びとともにグレネードを撃ち返して、素早く思考するマリア。

(はぐれてしまったドクターが気がかりだけでも……!)

正確には、彼が持っている『虎の子』の安否が気になるところだが。戦闘真つただ中の今では、どうすることもできなかった。

(最悪、二課に捕縛されてしまうというのも手か)

迫ってきた戦闘員を、翻したマントで殴りつけ。

マリアは内心で、自嘲に笑う。

ふと気づけば、足元は昏倒した戦闘員でいっぱいになっていた。

奥を見ればまだまだ後続が来ているものの、好機と判断。

踵を返して、移動を開始する。

追ってくる銃弾も戦闘員も、予想通り。

殿を務め始めて、もうだいぶ時間が経っている。

そろそろ合流しようと結論付けたマリアは、一気に加速して引き離れた。

怒号が遠くなってきたところで、ギアを解除する。

(ギアの反応を見た二課の装者達と、潰しあってくれば御の字なのだけど) 淡い希望を抱きながら、木立の合間を隠れて移動しようとして。

「——見つけたぞ!!」

「ツち」

思ったよりも早いと、思わず舌を打つ。

飛び掛かってくる銃弾達をよけながら、再びギアを纏おうとして。

「そこまでだ」

より響いた、力強い声。

思わず振り向けば、そこには。

頭に銃口を突き付けられた、家族達が。

「シンフォギアを捨てて、投降してもらおうか。銃弾は、貴様の歌より早いぞ」

「マリア、逃げるデス！」

「わたし達はいいから！言うことを聞いちゃダメ！」

絶体絶命の状況ながらも、調と切歌は必死に逃亡を訴える。

だが、

「——立場が分かかっていないようだな」

そんな盛大なため息と共に、二人の足が打ち抜かれた。

「ぐああうっ……！！」

「ぎゅう……！！」

「調、切歌……！！」

渾身の力で悲鳴を飲み込む二人。

安否を気遣うナスターシャに、返事をする余裕がないのは。

火を見るより明らかだった。

「我々は『お願い』をしているのではないんだぞ？」

そして、再び頭に添えられる銃口。

もはや、何の発言も抵抗も許されなかった。

(どうする……どうする……!?)

撃たれた太ももからは、どくどくと血が流れだしている。

心なしか、二人の顔色も悪い。

このまま放置すれば、失血死してしまうだろう。

—— マリアは考える。

蜂起した理由と、家族の命。

天秤を何度も揺れ動かして。

それでも、手にしたのは。

「マリア……!」

「マリア、そんな……!」

膝をついて、両手を上げることだった。

「か……い……とだ」

悲痛な声に答えられないまま、兵士が背後に迫るのを感じて。

「……これ、何の騒ぎ？」

「誰だツ!？」

突然の乱入者に、兵士たちがざわつく。

彼らにとつても、もちろんマリア達にとつても新手的存在。

そんな動揺の源は、なんともものんきな様子で歩み寄ってきて。

「お陰で魚が逃げちやつたじゃないの。せつかくの休日^{（きゅうじつ）}に邪魔されてボウズとか、勘弁願いたいんだけど」

男物のジーンズにTシャツという、なんともラフな格好をした彼女は。

担いだ釣り竿で肩を叩きながら、兵士たちを睨みつけたのだった。

「……は、ははっ。それは失礼したレディ」

緊張感のないことをのたまった女性を、兵士のリーダーは敵ではないと踏んだらしい。

警戒は解かないまま。

おどけた様子で、調に突き付けていた銃口を女性に向け直した。

「このまま何も見なかったことにして、立ち去ることをお勧めしよう。それがお互いのためになる、違うかい？」

「えっ、やだ。大の男に女子どもが囲まれてんのに、通報不可避でしょう」

『あたし善良な市民だし』と、頭を掻く女性。

銃口にも臆さない、気だるげな態度が気に入らなかつたらしい。

リーダーの額には、青筋が浮かんでいた。

「はあーっ……うん？」

そんなことも露知らず、ぶすつと仏頂面になっていた女性の顔が。

ある一点を見つめた途端、ぱつと明るくなった。

「あれーっ？あなた、マリア・カデンツァヴァナ・イヴじやない!? こないだ妹とライブしてた!!」

「え、えつと、そう、そう、なのだけれど……?」

こんな状況で声を掛けられると思わなかったマリアは、『妹?』と首を傾げながら、思わず返事をしてしまう。

「やーっぱり! なあに? もしかして割とピンチだったりするの?」

「え、ええ……」

「はあーっ、なるほどなるほど……そういうこと……」

混乱するマリアを他所に、一人何かを納得した女性は。

やがて、庇うように立ち塞がった。

「……なんの真似だ」

先ほどから状況をひっかきまわす女性に、いら立ちを覚えていたのだろう。

リーダーの声は、底冷えしている。

「気が変わった、何が何でもあんたらおっぱらわにやならんわ」

「……それは、我々と敵対するということではないのか?」

「ええ、そうよ」

「テロリストに与すると?」

「ああ、さすがにそれはちよつと……でも」

釣り竿を置きながら語る女性の顔は、自信たつぷりで。

「あんなに素敵な歌を歌える女だもの」

「決して、心底の悪人じゃないと信じるわ」

そう、言い切ったのだった。

対するリーダーは、冷たい目を向けたまま。

右手を、ゆらりと上げて。

「——fire!!」

瞬間、雨あられと迫る弾丸。

何が何だか分からないマリアは、それでも何とか、女性だけでも庇おうとして。

「——ッ!?!」

立ち上がった途端、動きを止められる。

はっとなつて見ると、女性からほとばしる力の本流。

プレッシャーか、はたまたオーラか。

とにかく、確かな実態のあるものが、迫っていた銃弾を吹き飛ばしたのを見た。

「はああああああ……!」

中央にいる女性は、両手を強く握りしめて。

力を解き放つように、広げた。

「ったああああああああああ!!」

吹き荒れる暴風。

飛び交う木の葉と土埃に、マリアは思わず顔を庇う。

そして、風が止んだ頃。

恐る恐る、腕をどけてみれば。

「——帰るんなら、今のうちよ」

まつさらな髪、その間からそびえる二本角。

肘から先と膝から先、それから胸を覆う鱗。

背中には、黒い皮膜を持った、真っ赤な翼が一对。

「大丈夫大丈夫、ドラゴン相手にや勝てないもの。誰も責めやしないから」

瞳孔が縦に走った目を、無邪気に細めて。

女性は、笑って見せたのだった。